

「新中間層」が西洋文化を担ったのか ークラシック音楽趣味から見る日本の上層中産階級ー

加藤善子(大阪大学大学院研究生)

1. はじめに

教育社会学における社会移動研究は、属籍－教育機会－学歴－それによって獲得される職業という一連のプロセスに焦点をあてた研究が行われてきた。学生たちの出発点を、最初は属籍から、明治後期以降は中間層ということばから、学生の進学行動や学生文化、ライフスタイルの変化が説明されてきた。中等、高等教育の進学機会の分析には「新中間層」「旧中間層」の構成比の推移が説明に利用される。特に、学生文化の多様化やライフスタイル等の変化は、大正期に増加した「新中間層」出身の学生によってもたらされたとする見解が一般的であり(Roden1983 など)、この見解を前提として、「新中間層」があるライフスタイルを共有した「社会階級」とみなす論者もいる(伊藤 1999、10 頁など)。しかし、西洋文化の担い手が果たして新中間層に限定されていたのか否かは実証的に検討されてはいない。

本報告では、教育社会学における近代日本研究の中に「中間層」の一部を含む「中産階級」を位置づけ、階層論を展開する方向性を提起したいと思う。その際、手がかりとしてクラシック音楽愛好者の社会的構成に注目し、その普及過程を通して、その担い手が「新中間層」であるよりむしろ、「上層中産階級」と考えられることを提起し、そして、文化の担い手から近代日本の社会構造を捉え直す可能性を考察する。本報告は、西洋文化の普及を、日本の階級論に接続させるための序論である。

2. 「新中間層」が西洋文化を担ったのかークラシック音楽愛好者の社会的構成

以下、実際に「新中間層」によって西洋文化が独占されていたのか否かを、クラシック音楽愛好者を例にとって検討する。まずは、マスメ

ディアが普及する以前に音楽愛好者となった大田黒元雄、堀内敬三、徳川頼貞の愛好スタイルとその社会背景を検討し、次に、新交響楽団の昭和5年の脱会者名簿等を参考にして、その出身階層を検討する。

戦前に 60 冊以上の西洋音楽関係の著書を持つ大田黒元雄は、実業家大田黒重五郎の長男として 1893(明治 26)年に東京に生まれた。重五郎は、東京外国語学校を出て三井物産で敏腕を振るい、その後独立して成功を収めている。本人も、本職は「東京高級鋳物(株)取締役、東邦重工業(株)常任監査、電業社 原動機製作所各(株)監査」(『大衆人事録』帝国秘密探偵社 1943)となっている。堀内敬三は、大田黒と同様、日本における最初の音楽評論家の一人であるが、彼は東京神田浅田飴本舗の三男として 1897(明治 30)年に生まれており、これも「新中間層」ではなく「旧中間層」の出身である。徳川頼貞は、日本で初の音楽図書館をつくった大パトロンであるが、彼は、田安家の五男から紀州藩主を継いだ徳川頼倫侯の長男であり、1892(明治 25)年に東京麻布飯倉に生まれている。

初期の愛好者であるこの三人は、いずれも「新中間層」出身ではなく、実業家、大商人、貴族の家に生まれ、かつ、莫大な経済的バックグラウンドを持っている。西洋音楽に限っていえば、その担い手は、上層中産階級に属する者、或いはそれ以上の社会階級に属する者が、存在していたのである。

次に、昭和2年から月二回の定期演奏会を続けた新交響楽団の会員がどのような人々であったかを見てみたい。この楽団の機関紙であった『フィルハーモニー』に掲載されている、脱会者及び関西会員の名簿から、その会員の属性を検討する(表は省略)。

ここで用いた人名辞典は、係累が記載されている『東京人名録』『昭和人名辞典』『財界人名辞典』である。名簿に記載される基準は、『東京人名録』では「第三種所得税 70 円以上、ま

たは営業収益 70 円以上納入者」、『昭和人名辞典』でははっきりとした基準はなく「凡ゆる階級に亘る知名の人士を網羅せる」とある。『財界人名辞典』にもはっきりとした基準がない。ここで推測できるのは、このような人名辞典に掲載される係累を持つ愛好者が一方に存在し、しかし同時に、人名辞典に掲載されるほどは経済的基盤を持たない家庭出身者も会員の一部を占めているということである。

しかも、身元が判明した会員は、殆どが係累として掲載されている。しかも、判明した人物のほとんどは、昭和 5 年の時点では経済力のない学生か、卒業間もない若者であった。社交が目的であれば、財界人であるその親が会員であってもおかしくない。しかし、実際会員になって演奏会に通っていたのは、(おそらく親に会費を出してもらっている)その子供たちであり、しかも、学生であった。名簿に掲載されている会員たちの親族は、判明する限りでは地方の大資産家、財閥系実業家から上級ホワイトカラーまで、「新中間層」としてまとめるには少々困難である。「上層中産階級」としての分類が適当であると思われる。

親ではなくてその子どもが新交響楽団の会員であったのはなぜか、という点については、このように考えられる。彼らは判明分を見る限りは学生であり、会費を払えたとは考えられず、両親が払っていたと思われる。定期演奏会に通うことを子どもに許せる、西洋文化に理解をもった両親—しかし自らは西洋音楽を積極的に聞くことはなかった両親—である。なぜなら、日本の新興ブルジョワジーの初代が接近できたのは、日本の伝統文化であり、そしてその方が人脈を獲得するのに有利であったためである。西洋音楽をたしなみ、積極的に活動することには、社会的には何のメリットもなかったのである。

西洋音楽は、経済力と西洋文化への近さというバックグラウンドを同時に要求しており、最初の愛好者たちは必然的に「新中間層」と「上層中流階級」の交差するところを中心にして、かつ、その周囲から、多数ではなく少数生まれたのである。

昭和初期における三人の西洋音楽愛好のリーダーたち、および新交響楽団の一部の会員の属性から明らかになったのは、最初の愛好者たちが「新中間層」から生まれてきたわけではない

ことである。「旧中間層」出身の愛好者が先行し、「上層中産階級」に属する者もいる。もちろん貴族は「新中間層」にも「旧中間層」にも属さない。ここで属性の判明した愛好者に限定すれば、社会の上層部に位置している点は共通しているが、彼らはいくつかの社会集団にまたがっているのである。

3. 西洋文化普及の二元性—文化から階級構造をとらえなおす

この試みによって、「中間層」と「中産階級」の関係性がいくらか明確になったと考える。そして、属性や新/旧「中間層」という視点を捨てず、かつ資産・所得状況や生活様式などの視点を内包するより広義な「上層中産階級」から西洋文化の担い手をとらえなおすことによって、近代日本の社会構造を捉え直すことができると思われる。

西洋音楽の担い手に限定すれば、彼らがいわゆる「二代目」であることが重要である。経済的なバックグラウンドと西洋文化への近さという二点が、西洋音楽に近づくための必要条件であったと考えられ、クラシック音楽は必然的にある一定以上の階層の生活様式を前提とした趣味として成立したと考えられるが、しかし、この条件を備えた者が積極的にクラシック音楽に近づいたのかは疑わしい。昭和初期においても愛好者は若年層であり、上層中産階級に分類される彼らの親の世代は、日本の伝統文化に接近した。彼らの内部で、どの文化を選択すべきかという模索的状況があり、階級文化として西洋音楽が奨励されたわけではない。

また、レコードが普及した昭和 10 年代になると、西洋音楽の主要な担い手は学生となり、様々な出身階層の学生に支持された。西洋音楽は、一方では上層中産階級に属する者が愛好者の一部を占めていたが、その一方で、様々な階級に広く愛好されるようにもなったという、普及の二元性が浮かび上がってくる。このことは、近代日本の社会階級の開放性を表しているのだろうか、それとも、日本における文化や趣味とは、階級的つながりを強める働きを持っていないという可能性を示しているのだろうか。この問題は、今後の課題として取り組む必要があろう。